

テーマ：「文化的景観」の視点から地域の自然・文化資産を見直す

関連の深いコース：人間文化コース、ローカルサステイナビリティコース

1. このテーマを学ぶために

私は、本来の専門である民俗学的視点をもとに、地域の伝統文化資産が、エコな地域づくりや人間形成に役立つ可能性を考える授業・ゼミを持っています。民俗学は**民間伝承**（地域のごくふつうの人々の暮らしによって集団的に形作られ、時代を超えて伝えられてきた暮らしぶりや心の持ち方）を研究対象とします。この民間伝承が素材となる場合が多く、かつ環境というテーマと密接に関わる考え方に「文化的景観」という概念があります。

文化的景観は、簡単にいえば、単なる視覚的な眺めにとどまらず、その眺めを成り立たせている**地域の暮らしぶりにかかわる文化資産**（人手の加わった「自然」も含む）を、**持続可能性**の観点から価値づける概念です。例えば日本の**里山・里海**（**自然と人間の共同作品**としての生活環境）や、**鎮守の森**（宗教的な聖地として自然が守られてきた場所）などは好例です。**歴史的なまちなみ**も範囲に入ります。有形物だけでなく、**無形の資産**（生活技術・習俗、伝統行事、昔話・伝説、方言、アイデンティティーに関わる集団的な心意など）、また視覚にとどまらず音、匂い、触感、食など「**五感**」の素材も、文化的景観の構成要素と考えることができます。

「遺産」という語を使わず「資産」と記すのは、過去に形づくられた、保存すべき宝物というだけではなく、今後それをベースにして、新たに**エコな生活文化を創造していきける可能性をもつ素材**、という含みも持つためです。伝統文化に由来する地域の個性を活かした、さまざまな新しい試みが各地で行われています。それらの多くは、**エコツーリズム、グリーンツーリズム、エコミュージアム**等の用語で括ることができます。「場」の個性と結びついた**アート**による地域づくりや、**映画・アニメ**による地域振興の試みなどもその例に入ります。こうした近年の潮流は、「文化的景観」を活かそうとする活動の試みである、と広くまとめることができますでしょう。

仮に、この「文化的景観」をテーマにしている私のゼミに参加することを想定した履修モデルを示してみると、コアになるのは**環境表象論ⅠⅡ**です。私の立場は「実学」（＝具体的に政策を立案する）ではなく、素材の価値を考察するところにあるので、実践的な地域形成について学ぶためには、2. に示す他の科目例のうち、社会・地域関連の科目や、地方自治・自然保護の基礎が学べる科目で素養を持つことが望まれます。協働による地域形成活動というより、エコな地域づくりの土台となる個々の「人間形成」、共生志向のライフスタイル（ロハス）に興味・関心がある人には、環境というテーマに人文科学の視点からとりくむ授業が有益であると思います。

2. テーマに関連した推奨科目

環境表象論ⅠⅡ	地域形成論	地域経済論ⅠⅡ	地域コモンズ論
都市環境論ⅠⅡ	NPO・ボランティア論	フィールド調査論	環境社会論ⅠⅢⅣ
市民社会と政治	自治体環境政策論ⅠⅡ	自然環境論Ⅳ	自然環境政策論ⅠⅡ
環境倫理学ⅠⅡ	仏教思想	西欧近代批判の思想	応用倫理学
日本環境史論ⅠⅡ	ヨーロッパ環境史論ⅠⅡ	環境人類学ⅠⅢⅣ	比較演劇論ⅠⅡ
日本詩歌の伝統	食と農の環境学ⅠⅢⅣ	環境教育論	アーティストと社会貢献